

毛利先生

芥川龍之介

青空文庫

歳晚さいばんのある暮方、自分は友人の批評家と二人で、所謂いわゆる腰弁街こしべんかいどう道の、裸になった
 並樹の柳の下を、神田橋かんだばしの方へ歩いていた。自分たちの左右には、昔、島崎藤村しまざきとうそんが
 「もつと頭かしらをあげて歩け」と慷慨こうがいした、下級官吏らしい人々が、まだ漂ただよっている黄昏たそがれ
 の光の中に、蹠そうろう蹠そうろうたる歩みを運んで行く。期せずして、同じく憂鬱がいうな心もちを、払いの
 けようとしても払いのけられなかったからであろう。自分たちは外套がいとうの肩をすり合せる
 ようにして、心もち足を早めながら、大手町おおてまちの停留場ていりゅうばを通りこすまでは、ほとんど一ひ
 言こともきかずにいた。すると友人の批評家が、あすこの赤い柱の下に、電車を待っている
 人々の寒むような姿を一瞥もつりすると、急に身ぶるいをつとして、
 「毛利先生の事を思い出す。」と、独り語ごのように呟つぶやいた。
 「毛利先生と云うのは誰だい。」

「僕の中学の先生さ。まだ君には話した事がなかったかな。」
 自分は否いなと云う代りに、黙ひそって帽子の底ひそしを下げた。これから下しもに掲げるのはその時その
 友人が、歩きながら自分に話してくれた、その毛利先生の追憶ついおくである。――

もうかれこれ十年ばかり以前、自分がまだある府立中学の三年級にいた時の事である。

自分の級に英語を教えていた、安達先生と云う若い教師が、インフルエンザから来た急性肺炎で冬期休業の間に物故してしまった。それが余り突然だったので、適当な後任を物色する余裕がなかったからの窮策であろう。自分の中学は、当時ある私立中学で英語の教師を勤めていた、毛利先生と云う老人に、今まで安達先生の受持っていた授業を一時囑託した。

自分が始めて毛利先生を見たのは、その就任当日の午後である。自分たち三年級の生徒たちは、新しい教師を迎えると云う好奇心に圧迫されて、廊下に先生の靴音が響いた時から、いつになくひっそりと授業の始まるのを待ちうけていた。所がその靴音が、日かげの絶えた、寒い教室の外に止まって、やがて扉が開かれると、——ああ、自分はこう云う中にも、歴々とその時の光景が眼に浮んでいる。扉を開いてはいつて来た毛利先生は、何より先その背の低いのがよく縁日の見世物に出る蜘蛛男と云うものを聯想させた。が、その感じから暗澹たる色彩を奪ったのは、ほとんど美しいとでも形容したい、光滑々たる

先生の禿げ頭で、これまた後頭部のあたりに、種々たる胡麻塩の髪の毛が、わずかに残喘を保っていたが、大部分は博物の教科書に画が出ている駝鳥の卵なるものと相違はない。最後に先生の風采を凡人以上に超越させたものは、その怪しげなモオニング・コオトで、これは過去において黒かったと云う事実を危く忘却させるくらい、文字通り蒼然たる古色を帯びたものであった。しかも先生のうすよごれた折襟には、極めて派手な紫の襟飾が、まるで翼をひろげた蛾のように、もののしく結ばれていたと云う、驚くべき記憶さえ残っている。だから先生が教室へはいると同時に、期せずして笑を堪える声が、そここの隅から起つたのは、元より不思議でも何でもない。

が、読本と出席簿とを抱えた毛利先生は、あたかも眼中に生徒のないような、悠然とした態度を示しながら、一段高い教壇に登って、自分たちの敬礼に答えると、いかにも人の好きそうな、血色の悪い丸顔に愛嬌のある微笑を漂わせて、

「諸君」と、金切声で呼びかけた。

自分たちは過去三年間、未嘗てこの中学の先生から諸君を以て遇せられた事は、一度もない。そこで毛利先生のこの「諸君」は、勢い自分たち一同に、思わず驚嘆の眼を見開かせた。と同時に自分たちは、すでに「諸君」と口を切った以上、その後はさしずめ授

業方針か何かの大演説があるだろうと、息をひそめて待ちかまえていたのである。

しかし毛利先生は、「諸君」と云つたまま、教室の中を見廻して、しばらくは何とも口を開かない。肉のたるんだ先生の顔には、悠然たる微笑の影が浮んでゐるのにかわ関わらず、こ口角の筋肉は神経的にびくびく動いている。と思うと、どこか家畜のような所のある晴はれば々した眼の中にも、絶えず落ち着かない光が去来きらいした。それがどうも口にこそ出さないが、何か自分たち一同に哀願したいものを抱いていて、しかもその何ものかと云う事が、先生自身にも遺憾いひかんながら判然と見きわめがつかないらしい。

「諸君」

やがて毛利先生は、もうりこう同じ調子で繰返した。それから今度はその後へ、丁度その諸君と云う声の反響を捕えようとする如く、

「これから私が、諸君にチョイス・リイダアを教える事になりました」と、いかにあわただ慌しくつけ加えた。自分たちはますます好奇心の緊張を感じて、ひっそりと鳴りを静めながら、熱心に先生の顔を見守っていた。が、毛利先生はそう云うと同時に、また哀願するような眼つきをして、ぐるりと教室の中を見廻すと、それぎりで急に椅子いすの上へ弾機バネがはずれたように腰を下した。そうして、すでに開かれていたチョイス・リイダアの傍かたわらへ、出席簿を

ひろげて眺め出した。この唐突たる挨拶の終り方が、いかに自分たちを失望させたか、と云うよりもむしろ、失望を通り越して、いかに自分たちを滑稽に感じさせたか、それは恐らく云う必要もない事であろう。

しかし幸いにして先生は、自分たちが笑を洩すのに先立って、あの家畜のような眼を出席簿から挙げたと思うと、たちまち自分たちの級の一人を「さん」づけにして指名した。勿論すぐに席を離れて、訳読して見ると云う相図である。そこでその生徒は立ち上って、ロビンソン・クルウソーか何かの一節を、東京の中学生に特有な、気の利いた調子で訳読した。それをまた毛利先生は、時々紫の襟ネクタイ飾へ手をやりながら、誤訳は元より些細な発音の相違まで、一々丁寧に直して行く。発音は妙に氣取った所があるが、大体正確で、明瞭で、先生自身もこの方面が特に内心得意らしい。

が、その生徒が席に復して、先生がそこを訳読し始めると、再び自分たちの間には、ここから失笑の聲が起り始めた。と云うのは、あれほど発音の妙を極めた先生も、いざ翻訳をするとなると、ほとんど日本人とは思われないくらい、日本語の数を知っていない。あるいは知っていても、その場に臨んでは急には思い出せないであろう。たとえばたった一行を訳するにしても、「そこでロビンソン・クルウソーは、とうとう飼う事にしまし

た。何を飼う事にしたかと云えば、それ、あの妙な獣けだもので——動物園に沢山いる——何と云いましたかね、——ええとよく芝居をやる——ね、諸君も知っているでしょう。それ、顔の赤い——何、猿？　そうそう、その猿です。その猿を飼う事にしました。」

勿論猿でさえこのくらいだから、少し面倒な語ことばになると、何度もその周囲を低徊した揚句でなければ、容易に然るべき訳語にはぶつからない。しかも毛利先生はその度にひどく狼狽ろうばいして、ほとんどあの紫の襟ネクタイ飾を引きちぎりはしないかと思うほど、頻しきりに喉のど元へ手をやりながら、当惑あわただそうな顔をあげて、慌あわただしく自分たちの方へ眼を飛ばせる。と思うとまた、両手で禿はげ頭を抑えながら、机の上へ顔を伏せて、いかにも面目なさそうに行きづまってしまう。そう云う時は、ただでさえ小さな先生の体が、まるで空気の抜けた護謨ゴム風船せんのように、意気いくじ地なく縮ちぢみ上つて、椅子いすから垂れている両足さえ、ぶらりと宙に浮びそうな心もちがした。それをまた生徒の方では、面白い事にして、くすくす笑う。そうして二三度先生が訳読を繰返す間あいだには、その笑い声も次第に大胆になって、とうとうしまいに一番前の机からさえ、公然と湧き返るようになった。こう云う自分たちの笑い声がどれほど善良な毛利先生につらかったか、——現に自分ですら今日その刻薄こくはくな響を想起すると、思わず耳を蔽おほいたくなる事は一いっさい再でない。

それでもなお毛利先生は、休憩時間の喇叭らつぱが鳴り渡るまで、勇敢に訳読を続けて行つた。そうして、ようやく最後の一節を読み終ると、再び元のような悠然たる態度で、自分たちの敬礼に答えながら、今までの慘澹さんたんたる悪闘も全然忘れてしまったように、落ち着き払つて出て行つてしまった。その後あとを追いかけてどつと自分たちの間から上つた、嵐のような笑い声、わざと騒々しく机の蓋ふたを明けたり閉めたりさせる音、それから教壇へとび上つて、毛利先生の身ぶりや声色こわいろを早速使つて見せる生徒——ああ、自分はまだその上に組長の章しるしをつけた自分までが、五六人の生徒にとり囲まれて、先生の誤訳を得々とくとくと指摘していたと云う事実すら、思い出さなければならぬのであろうか。そうしてその誤訳は？

自分は実際その時でさえ、果してそれがほんとうの誤訳かどうか、確かな事は何一つわからずに威張いばつていたのである。

それから三四日経たある午の休憩時間である。自分たち五六人は、機械体操場の砂だまりに集まつて、ヘルヘルの制服の背を暖い冬の日向ひなたに曝さらしながら、遠からず来るべき学年試験

の噂^{うわさ}などを、口まめにしゃべり交していた。すると今まで生徒と一しよに鉄棒へぶら下っていた、体量十八貫と云う丹波^{たんば}先生が、「一二、」と大きな声をかけながら、砂の上へ飛び下りると、チョッキばかりに運動帽をかぶった姿を、自分たちの中に現して、

「どうだね、今度来た毛利^{もうり}先生は。」と云う。丹波先生はやはり自分たちの級に英語を教えていたが、有名な運動好きで、兼ねて詩吟^{しぎん}が上手だと云う所から、英語そのものは嫌っていた柔剣道の選手などと云う豪傑連の間にも、大分^{だいぶん}評判がよかったらしい。そこで先生がこう云うと、その豪傑連の一人がミットを弄^{もてあそ}びながら、

「ええ、あんまり——何です。皆^{みんな}あんまり、よく出来ないようだって云っています。」と、柄^{がら}にもなくはにかんだ返事をした。すると丹波先生はズボンの砂を手巾^{ハンケチ}ではたきながら、得意そうに笑って見せて、

「お前よりも出来ないか。」

「そりや僕より出来ます。」

「じゃ、文句を云う事はないじゃないか。」

豪傑はミットをはめた手で頭を掻きながら、意気^{いくじ}地なくひっこんでしまった。が、今度は自分の級の英語の秀才が、度の強い近眼鏡をかけ直すと、年に似合わずませた調子で、

「でも先生、僕たちは大抵専門学校の入学試験を受ける心算なんですから、出来る上にも出来る先生に教えて頂きたいと思つてゐるんです。」と、抗弁した。が、丹波先生は不
 いかわらず
 相変勇壮に笑いながら、

「何、たつた一学期やそこいら、誰に教わつたつて同じ事さ。」

「じゃ毛利先生は一学期だけしか御教えにならないんですか。」

この質問には丹波先生も、いささか急所をつかれた感があつたらしい。世故に長けた先生はそれにはわざと答えずに、運動帽を脱ぎながら、五分刈の頭の埃を勢よく払い落すと、急に自分たち一同を見渡して、

「そりや毛利先生は、随分古い人だから、我々とは少し違つてゐるさ。今朝も僕が電車へ乗つたら、先生は一番まん中にかけていたつが、乗換えの近所になると、『車掌、車掌』つて声をかけるんだ。僕は可笑しくつて、弱つたがね。とにかく一風変つた人には違いないさ。」と、巧に話頭を一転させてしまった。が、毛利先生のそう云う方面に関してなら、何も丹波先生を待たなくとも、自分たちの眼を駭かせた事は、あり余るほど沢山ある。「それから毛利先生は、雨が降ると、洋服へ下駄をはいて来られるそうです。」

「あのいつも腰に下つてゐる、白い手巾へ包んだものは、毛利先生の御弁当じゃないんで

すか。」

「毛利先生が電車の吊^{つり}皮^{かわ}につかまっていられるのを見たら、毛糸の手袋が穴だらけだったって云う話です。」

自分たちは丹波先生を囲んで、こんな愚にもつかない事を、四方からやかましく饒^{しゃ}舌^べり立てた。ところがそれに釣りこまれたのか、自分たちの声が一しきり高くなると、丹波先生もいつか浮き浮きした声を出して、運動帽を指の先でまわしながら、

「それよりかさ、あの帽子が古物^{こぶつ}だぜ——」と、思わず口へ出して云いかけた、丁度その時である。機械体操場と向い合つて、わずかに十歩ばかり隔っている二階建の校舎の入口へ、どう思つたか毛利先生^{もうり}が、その古物の山高帽^{やまたかぼう}を頂いて、例の紫の襟^{ネクタイ}飾^{しきい}へ仔細らしく手をやつたまま、悠然として小さな体を現した。入口の前には一年生であろう、子供のような生徒が六七人、人馬^{ひとうま}か何かして遊んでいたが、先生の姿を見ると、これは皆先を争つて、丁寧に敬礼する。毛利先生もまた、入口の石段の上にさした日の光の中に佇^{たたず}んで、山高帽をあげながら笑つて礼を返しているらしい。この景色を見た自分たちは、さすがに皆一種の羞恥^{しゆうち}を感じて、しばらくの間はひっそりと、賑^{にぎやか}な笑い声を絶つてしまった。が、その中で丹波先生だけは、ただ、口を噤^{つぐ}むべく余りに恐縮と狼^{ろう}狽^{ばい}とを重ねたからでもあ

つたろう。「あの帽子が古物だぜ」と、云いかけた舌をちよいと出して、素早く運動帽をかぶったと思うと、突然くるりと向きを変えて、「一——」と大きく喚^{わめ}きながら、チョツキ一つの肥った体を、やにわに鉄棒へ抛りつけた。そうして「海老上^{えびあが}り」の両足を遠く空ざまに伸しながら、「二——」と再び喚いた時には、もう冬の青空^{あざやか}を鮮に切りぬいて、楽々とその上に上^{あが}つていた。この丹波先生の滑稽なてれ隠しが、自分たち一同を失笑させたのは無理もない。一瞬間声を呑んだ機械体操場の生徒たちは、鉄棒の上の丹波先生を仰ぎながら、まるで野球の応援でもする時のように、わつと囃^{はや}し立てながら、拍手をした。

こう云う自分も皆と一しよに、喝^{かつさい}采をしたのは勿論である。が、喝采している内に、自分は鉄棒の上の丹波先生を、半ば本能的に憎み出した。と云つてもそれだけまた、毛利先生に同情を注いだと云う訳でもない。その証拠にはその時自分が、丹波先生へ浴びせた拍手は、同時に毛利先生へ、自分たちの悪意を示そうと云う、間接目的を含んでいたからである。今自分の頭で解剖すれば、その時の自分の心もちは、道徳の上で丹波先生を侮蔑^{ぶべつ}すると共に、学力の上では毛利先生も併せて侮蔑していたとでも説明する事が出来るかも知れない。あるいはその毛利先生に対する侮蔑は、丹波先生の「あの帽子が古物^{こぶつ}だぜ」によつて、一層然るべき裏書きを施^{ほどこ}されたような、ずうずうしさを加えていたとも考える事

が出来たであろう。だから自分は喝采しながら、聳かした肩越しに、昂然として校舎の入口を眺めやった。するとそこには依然として、我毛利先生が、まるで日の光を貪っている冬蠅か何かのように、じつと石段の上に佇みながら、一年生の無邪気な遊戯を、余念もなく独り見守っている。その山高帽子とその紫の襟飾と——自分は当時、むしろ、晒すべき対象として、一瞥の中に収めたこの光景が、なぜか今になって見ると、どうしてもまた忘れる事が出来ない。……

就任の当日毛利先生が、その服装と学力とによつて、自分たちに起させた侮蔑の情は、丹波先生のあの失策（？）があつて以来、いよいよ級全体に盛んになった。すると、また、それから一週間とたたないある朝の事である。その日は前夜から雪が降りつづけて、窓の外にさし出ている雨天体操場の屋根などは、一面にもう瓦の色が見えなくなつてしまったが、それでも教室の中にはストオヴが、赤々と石炭の火を燃え立たせて、窓硝子につもる雪さえ、うす青い反射の光を漂わす暇もなく、溶けて行つた。そのストオヴの前に椅子

を据えながら、毛利先生は例の通り、かなきりこえ金切声をふりしぼって、熱心にチョイス・リイダアの中にあるサアム・オヴ・ライフを教えていたが、勿論誰も真面目まじめになって、耳を傾けている生徒はない。ない所か、自分の隣にいる、ある柔道の選手の如きは、読本とくほんの下へぶきようせかい武俠世界をひろげて、さつきからおしかわしゅんろう押川春浪の冒険小説を読んでいる。

それがかれこれ二三十分も続いたであろう。その中に毛利先生は、急に椅子いすから身を起すと、丁度今教えているロングフェロオの詩にちなんで、人生と云う問題を弁じ出した。

趣旨はどんな事だったか、さらに記憶に残っていないが、恐らくは議論と云うよりも、先生の生活を中心とした感想めいたものだったと思う。と云うのは先生が、まるで羽根を抜かれた鳥のように、絶えず両手を上げ下げしながら、あわただ慌しい調子で饒舌しゃべつた中に、

「諸君にはまだ人生はわからない。ね。わかりたいって、わかりはしません。それだけ諸君は幸福なんでしょう。我々になると、ちゃんと人生がわかる。わかるが苦しい事が多いです。ね。苦しい事が多い。これで私わたくしにしても、子供が二人ある。そら、そこで学校へ上げなければならぬ。上げれば——ええと——上げれば——学資？　そうだ。その学資が入るでしょう。ね。だから中々苦しい事が多い……」と云うような文句のあつた事を、かすかに覚えてゐるからである。が、何も知らない中学生に向つてさえ、生活難を訴うえる

——あるいは訴えない心算でも訴えている、先生の心もちなぞと云うものは、元より自分たちに理解されよう筈がない。それより訴えたと云うその事実の、滑稽な側面ばかり見た自分たちは、こう先生が述べ立てている中に、誰からともなくすくす笑い出した。ただ、それがいつもの哄然たる笑声に変らなかつたのは、先生の見すばらしい服装と金切声をあげて饒舌しゃべっている顔つきとが、いかにも生活難それ自身の如く思われて、幾分の同情を起させたからであろう。しかし自分たちの笑い声が、それ以上大きくならなかつた代りに、しばらくすると、自分の隣にいた柔道の選手が、突然武俠世界をさし置いて、虎のような勢いきおいを示しながら、立ち上つた。そうして何を云うかと思うと、

「先生、僕たちは英語を教えて頂くために、出席しています。ですからそれが教えて頂けなければ、教室へはいっている必要はありません。もしもつと御話が続けるのなら、僕は今から体操場へ行きます。」

こう云つて、その生徒は、一生懸命に苦い顔をしながら、恐しい勢でまた席に復した。自分はその時の毛利先生もうりくらい、不思議な顔をした人を見た事はない。先生はまるで雷らいに撃たれたように、口を半ば開けたまま、ストオヴの側へ棒立ちになつて、一二分の間あいだはただ、その慄ひようかん悍な生徒の顔ばかり眺めていた。が、やがて家畜かちくのような眼の中に、あの

何かを哀願するような表情が、際どくちくりと閃いたと思うと、急に例の紫の襟飾へ手をやって、二三度禿げ頭を下げながら、

「いや、これは私が悪い。私が悪かったから、重々あやまります。成程諸君は英語を習うために出席している。その諸君に英語を教えないのは、私が悪かった。悪かったから、重々あやまります。ね。重々あやまります。」と、泣いてでもいるような微笑を浮べて、何度となく同じような事を繰り返した。それがストオヴの口からさす赤い火の光を斜に浴びて、上衣の肩や腰の摺り切れた所が、一層鮮に浮んで見える。と思うと先生の禿げ頭も、下げる度に見事な赤銅色の光沢を帯びて、いよいよ駝鳥の卵らしい。

が、この気の毒な光景も、当時の自分には徒に、先生の下等な教師根性を暴露したものとしか思われなかった。毛利先生は生徒の機嫌をとってまでも、失職の危険を避けようとしている。だから先生が教師をしているのは、生活のために余儀なくされたので、何も教育そのものに興味があるからではない。――臃けながらこんな批評を逞ゆうした自分は、今は服装と学力とに対する侮蔑ばかりでなく、人格に対する侮蔑さえ感じながら、チョイス・リイダアの上へ頬杖をついて、燃えさかるストオヴの前へ立ったまま、精神的にも肉体的にも、火炙りにされている先生へ、何度も生意気な笑い声を浴びせかけた。勿論こ

れは、自分一人に限った事でも何でも無い。現に先生をやりこめた柔道の選手などは、先生が色を失つて謝罪すると、ちよいと自分の方を見かえつて、狡猾こうかつそうな微笑を洩もらしながら、すぐまた読本の下にある押川おしかわ春浪しゅんろうの冒険小説を、勉強し始めたものである。

それから休憩時間の喇叭らっぽうが鳴るまで、我わが毛利先生はいつもよりさらにしどろもどろになつて、憐あわれむべきロングフェロオを無二無三むにむさんに訳読しようとした。「Life is real, life is earnest」

「——あの血色の悪い丸顔を汗ばませて、絶えず知られざる何物かを哀願しながら、——」
う先生の読み上げた、喉のどのつまりそうな金切声かなきりごえは、今日こんにちでもなお自分の耳の底に残っている。が、その金切声の中に潜んでいる幾百万の悲惨な人間の声は、当時の自分たちの鼓膜こまくを刺戟ますべく、余りに深刻なものであつた。だからその時間中、倦怠けんたいに倦怠を重ねた自分たちの中には、無遠慮な欠伸あくびの声を洩らしたもののさえ、自分のほかにも少くはない。しかし毛利先生は、ストオヴの前へ小さな体を直立させて、窓硝子をかすめて飛ぶ雪にも全然頓着せず、頭の中の鉄条せんまいが一時にほぐれたような勢いきおいで、絶えず読本をふりまわしながら、必死になつて叫びつづける。「Life is real, life is earnest. —— Life is real, life is earnest」

「」……

こう云う次第だったから、一学期の雇庸期間こようがすぎて、再び毛利先生もうりの姿を見る事が出来なくなってしまった時も、自分たちは喜びこそすれ、決して惜しいなどとは思わなかった。いや、その喜ぶと云う気さえ出なかったほど、先生の去就きよしゆうには冷淡だったと云えるかも知れない。殊に自分なぞはそれから七八年、中学から高等学校、高等学校から大学と、次第に成人になるのに従って、そう云う先生の存在自身さえ、ほとんど忘れてしまうくらい、全然何の愛惜も抱かなかったものである。

すると大学を卒業した年の秋——と云つても、日が暮れると、しばしば深い靄もやが下りる、十二月の初旬近くで、並木の柳や鈴懸すずかけなどが、とうに黄いろい葉をふるっていた、ある雨あがりの夜の事である。自分は神田の古本屋ふるほんやを根気よくあさりまわって、歐洲戦争が始まってから、めつきり少くなつた独逸書ドイツを一二冊手に入れた揚句あげく、動くともなく動いている晩秋の冷い空気つめたを、外套がいとうの襟に防ぎながら、ふと中西屋なかにしやの前を通りかかると、なぜか賑にぎやかな人声と、暖い飲料とが急に恋しくなつたので、そこにあつたカッフェの一つへ、何気なく独りではいつて見た。

ところが、はいって見るとカツエの中は、狭いながららんとして、客の影は一人もない。置き並べた大理石の卓テエフルの上には、砂糖壺めつきの鍍金ばかりが、冷く電燈の光を反射している。自分はまるで誰かに欺あざむかれたような、寂しい心もちを味いながら、壁にはめこんだ鏡の前の、卓テエフルへ行テエフルって腰を下した。そうして、用を聞きに来た給仕に珈琲コオヒーを云いつけると、思い出したように葉巻を出して、何本となくマチを摺すった揚句あげく、やっとそれに火をつけた。すると間もなく湯気の立つ珈琲茶碗が、自分の卓テエフルの上に現れたが、それでも一度沈んだ気は、外に下りている靄もやのように、容易な事では晴れそうもない。と云って今古本屋から買こって来たのは、字の細い哲学の書物だから、ここでは折角の名論文も、一頁と読むのは苦痛である。そこで自分は仕方がなく、椅子の背へ頭をもたせてブラジル珈琲とハヴァナと代る代る使いながら、すぐ鼻の先の鏡の中へ、漫然と煮え切らない視線をさまよわせた。

鏡の中には、二階へ上る梯子はしご段の側面を始として、向うの壁、白塗りの扉ドア、壁にかけた音楽会の広告などが、舞台面の一部でも見るように、はつきりと寒く映うつっている。いや、まだそのほかに、大理石の卓テエフルが見えた。大きな針葉樹の鉢も見えた。天井から下った電燈も見えた。大形な陶器の瓦斯ガス煖炉も見えた。その煖炉の前を囲んで、しきりに何か話し

ている三四人の給仕の姿も見えた。そうして——こう自分が鏡の中の物象を順々に点検して、煖炉の前に集まっている給仕たちに及んだ時である。自分は彼等に囲まれながら、その卓に向っている一人の客の姿に驚かされた。それが、今まで自分の注意に上らなかったのは、恐らく周囲の給仕にまぎれて、無意識にカツフェの厨丁コックか何かと思いこんでいたからであろう。が、その時、自分が驚いたのは、何もいないと思った客が、いたと云うばかりではない。鏡の中に映っている客の姿が、こちらへは僅に横顔しか見せていないにも関わらず、あの駝鳥だちようの卵のような、禿はげ頭の恰好と云い、あの古色蒼然としたモオニング・コオトの容子ようすと云い、最後にあの永遠に紫な襟ネクタイ飾の色合いと云い、我毛利先生わがもうりだと云う事は、一目ですぐに知れたからである。

自分は先生を見ると同時に、先生と自分とを隔てていた七八年の歳月を、咄嗟とつさに頭の中へ思い浮べた。チョイス・リイダアを習っていた中学の組長と、今ここで葉巻の煙を静に鼻から出している自分と——自分にとってその歳月は、決して短かかったとは思われないが、すべてを押し流す「時」の流も、すでに時代を超越したこの毛利先生ばかりは、如何いかんともする事が出来なかつたからであろうか。現在この夜のカツフェで給仕と卓テーブルを分っている先生は、宛然えんぜんとして昔、あの西日にしびもささない教室で読本を教えていた先生である。禿

げ頭も変らない。紫の襟ネクタイ飾も同じであつた。それからあの金切かなきり声も———そういえば、先生は、今もあの金切声を張りあげて、忙せわしそうに何か給仕たちへ、説明しているようではないか。自分は思わず微笑を浮べながら、いつかひき立たない気分も忘れて、じつと先生の声に耳を借した。

「そら、ここにある形容詞がこの名詞を支配する。ね、ナポレオンと云うのは人の名前だから、そこでこれを名詞と云う。よろしいかね。それからその名詞を見ると、すぐ後に——このすぐ後にあるのは、何だか知っているかね。え。お前はどうかね。」

「関係——関係名詞。」

給仕の一人が吃どもりながら、こう答えた。

「何、関係名詞？　関係名詞と云うものはない。関係——ええと——関係代名詞？　そう、そう関係代名詞だね。代名詞だから、そら、ナポレオンと云う名詞の代りになる。ね。代名詞とは名に代ことばる詞と書くだろう。」

話の具合では、毛利先生はこのカツエの給仕たちに英語を教えてでもいるらしい。そこで自分は椅子いすをずらせて、違った位置からまた鏡を覗のぞきこんだ。すると果してその卓テーブルの上には、読本らしいものが一冊開いてある。毛利先生はその頁を、頻しきりに指でつき立てなが

ら、いつまでも説明に厭あきる容ようす子がない。この点もまた先生は、依然として昔の通りであった。ただ、まわりに立っている給仕たちは、あの時の生徒と反対に、皆熱心な眼を輝かせて、目白めじろお押しに肩を合せながら、慌あわただしい先生の説明におとなしく耳を傾けている。

自分は鏡の中のこの光景を、しばらく眺めている間に、毛利先生に対する温情が意識の表面へ浮んで来た。一そ自分もあすこへ行つて、先生と久きゆう闊かつを叙し合おうか。が、多分先生は、たった一学期の短い間、教室だけで顔を合せた自分なぞを覚えてしまい。よしまた覚えているとしても——自分は卒そつ然ぜんとして、当時自分たちが先生に浴びせかけた、悪意のある笑い声を思い出すと、結局名乗なのりなぞはあげない方が、遙はるかに先生を尊敬する所以ゆえんだと思ひ直した。そこで珈琲コーヒーが尽きたのを機し会おにして、短くなつた葉巻を捨てながら、そつと卓テエフルから立上ると、それが静にした心算つもりでも、やはり先生の注意みだを擾わづしたであろう。自分が椅子を離れると同時に、先生はあの血色の悪い丸顔を、あのうすよごれた折襟を、あの紫の襟ネクタイ飾えりを、一度にこちらへふり向けた。家畜かちくのような先生の眼と自分の眼とが、鏡の中で刹那せつなの間出あいだ会つたのは正にこの時である。が、先生の眼の中には、さつき自分が予想した通り、果して故人に遇つたと云う気色けしきらしいものも浮んでいない。ただ、そこに閃ひらいていたものは、例の如く何ものかを、常に哀願いたしているような、傷まましい目なざしだ

けであつた。

自分は眼を伏せたまま、給仕の手から伝票を受けとると、黙ってカツフエの入口にある帳場の前へ勘定に行つた。帳場には自分も顔馴染みの、髪を綺麗に分けた給仕頭が、退屈そうに控えている。

「あすこに英語を教えている人がいるだろう。あれはこのカツフエで頼んで教えて貰うのかね。」

自分は金を払いながら、こう尋ねると、給仕頭は戸口の往来を眺めたまま、つまらなそうな顔をして、こんな答を聞かせてくれた。

「何、頼んだ訳じゃありません。ただ、毎晩やつて来ちゃ、ああやって、教えているんです。何でももう老朽の英語の先生だそうで、どこでも傭つてくれないんだって云いますから、大方暇つぶしに来るんでしょう。珈琲一杯で一晩中、坐りこまれるんですから、こつちじゃあんまり難有くありません。」

これを聞くと共に自分の想像には、咄嗟に我毛利先生の知られざる何物かを哀願している、あの眼つきが浮んで来た。ああ、毛利先生。今こそ自分は先生を——先生の健気な人格を始めて髣髴し得たような心もちがする。もし生れながらの教育家と云うものがある

としたら、先生は実にそれであろう。先生にとつて英語を教えると云う事は、空気を呼吸すると云う事と共に、寸刻といえども止める事は出来ない。もし強いて止めさせれば、一度水分を失つた植物か何かのように、先生の旺盛な活力も即座に萎微してしまふのであらう。だから先生は夜毎に英語を教えると云うその興味に促されて、わざわざ独りこのカツエへ一杯の珈琲を啜りに来る。勿論それはあの給仕頭などに、暇つぶしを以て目さるべき悠長な性質のものではない。まして昔、自分たちが、先生の誠意を疑つて、生活のためと嘲つたのも、今となつては心から赤面のほかはない誤謬であつた。思えばこの暇つぶしと云い生活のためと云う、世間の俗悪な解釈のために、我毛利先生はどんなにか苦しんだ事であろう。元よりそう云う苦しみの中にも、先生は絶えず悠然たる態度を示しながら、あの紫の襟飾とあの山高帽とに身を固めて、ドン・キホオテよりも勇ましく、不退転の訳読を続けて行つた。しかし先生の眼の中には、それでもなお時として、先生の教授を受ける生徒たちの——恐らくは先生が面しているこの世間全体——同情を哀願する閃きが、傷ましくも宿つていたではないか。

刹那の間こんな事を考えた自分は、泣いて好いか笑つて好いか、わからないような感動に压せられながら、外套の襟に顔を埋めて、タカツエの外へ出た。が、後では毛利

先生が、明るすぎて寒い電燈の光の下で、客がい^{ない}のを幸^{さいわ}いに、不相^{あいかわ}変^{らず}金切^{かなきり}声^{ごえ}をふり立て、熱心な給仕たちにまだ英語を教^{おし}えている。

「名に代^{ことば}る詞だから、代名詞と云う。ね。代名詞。よろしいかね……」

（大正七年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

毛利先生

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>